

33 山口一照《松に藤岡花瓶》一点

大正十四年（一九二五）  
銀・金・四分一／象嵌

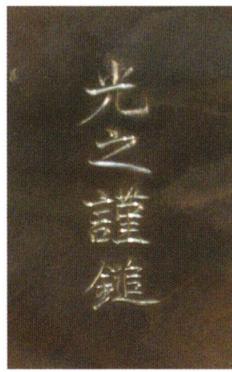
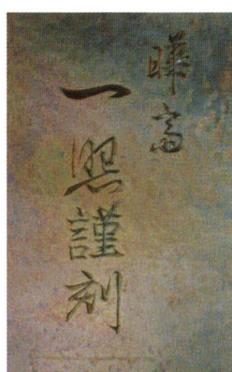
D 五八・五、H 七六・五



胴部に二本の松の大樹を配した巨大な銀製彫金花瓶である。左右へ枝を張る太く逞しい松の樹幹が薄肉に打ち出され、鎌目をつけて樹皮のざらついた肌合いを表現している。松葉も同様に打ち出されており、一葉一葉を丁寧に線彫して実もすべて金象嵌している。松に絡む藤は色金を用いることで、松を彩るアクセントとなつており、花や葉は高肉象嵌された箇所と、線彫して平象嵌された箇所がある。また、松の根本に見られる笹の葉にも金の平象嵌がほどこれている。大正末期にこれだけの大作を仕上げた作者の氣概には目を見張るものがあり、明治の彫金の壮麗さを最後に伝える一作である。

山口一照（一八七六～没年不詳）は岐阜に生まれ、十二才で東京へ出て山崎幸一に彫金を学ぶ。師の廃業にともない、十八才で佐藤一秀の門人となり、その後、関東彫金界の重鎮であつた香川勝廣の門人となる。鍛造を担当した鈴木光之は平田重光門下の鍛金家で、前掲No.14も鈴木による鍛造である。

本作は大正十四年の大正天皇大婚二十五年を祝して皇族方一同より献上された。





- ・各展覧会図録中、作品名や作者、制作年などの表記は、図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し、本ファイルを改変、再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は、書籍と同様に出典を明記してください。また、図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は、宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお、図版を営利目的の販売品や広告、また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金—海野勝珉とその周辺  
三の丸尚蔵館展覧会図録  
No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳

横溝廣子

発行

宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections